令和元年度　市史資料収蔵品展

土人形と西端の万年青鉢・蘭鉢 展

～ 碧南の土が生んだ造形 ～

令和２年 1 月 26 日（日）～ 2 月 24 日（月・祝）　月曜日休館（祝日は開館）

午前9時～午後9時

会場：碧南市文化会館（碧南市源氏神明町 4）　1階　展示室1　＜観覧無料＞

主催：碧南市教育委員会　　所管：碧南市文化財課・市史資料調査室

令和元年度　市史資料収蔵品展

土人形と西端の万年青鉢・蘭鉢 展　～ 碧南の土が生んだ造形 ～

令和２年１月26日(日)～２月24日(月･祝)

碧南市では、良質な粘土に恵まれ、18 世紀の後半には瓦造りが始まり、三州瓦の中心地の一つとして発展してきました。豊富な粘土が生み出したのは瓦だけではありませんでした。これまで、何度か収蔵品展で取り上げられた土人形もその一つでした。碧南での土人形作りは人々の生活が豊かになった昭和 30 年代に入ると、衣装雛に押されて一旦消えていきました。人々の記憶からも碧南で土人形が盛んに作られ、三河土人形の一大産地であったことも忘れ去られていったのです。

同じように、かつて碧南市の西端地区において、剛珍焼（ごうちんやき）と呼ばれる焼き物が生まれ、それを受け継いだ焼き物として、西端地区を中心に、万年青（おもと）鉢や蘭鉢が焼かれ、全国有数の産地であったことを知る人は少ないのではないでしょうか。

令和最初の収蔵品展として、今回は、「土人形と西端の万年青鉢・蘭鉢展 ～碧南の土が生んだ造形～」と題し、平成 25 年度に行われた土人形を扱った収蔵品展以後に、新たに碧南市の所蔵となった土人形と、西端地区で焼かれた万年青鉢や蘭鉢をご紹介したいと思います。

【土人形】

碧南で土人形が作られた最初は江戸末期の棚尾土人形とされています。その後、大浜土人形、旭土人形、新川土人形が生まれました。明治になって盛んに作られるようになった土人形は、大正、昭和と作り続けられました。土人形は晩秋の農閑期に副業として作られることが多かったようです。

高度経済成長期を迎え、景気が良くなり、人々の暮らしも少しずつ豊かになる中、雛人形も素朴で安価な土雛（土人形）から、豪華で美しい衣装雛へと、人々の求めも変わっていきました。土人形の需要が急速になくなる中、多くの土人形製作者が廃業し、昭和 30 年代台半ばには、碧南市においても作られなくなりました。

一旦途絶えた土人形作りですが、近年、碧南市では土人形作りが再開されています。現在、愛知県内で土人形を作っているのは、碧南の大浜土人形・旭土人形と半田の乙川土人形のみとなっています。碧南は三河の土人形作りの伝統が守られている最後の地域となっています。

【西端の万年青鉢・蘭鉢】

明治 16 年（1883）に常滑から招いた陶工滝田椿渓（たきたちんけい）に師事し、西端の人々は剛珍焼という焼き物を生み出しました。西端の土を生かした軟陶の楽焼（らくやき）であったとのことですが、詳しいことは一切分かっていません。

しかし、その後、その流れを受け継いだ楽焼の万年青鉢・蘭鉢作りが西端を中心とした地域で盛んになりました。大正から昭和初期にかけての全国的な園芸ブームを受けて、作る端から売れていったという興隆を迎えますが、戦争により一旦中断してしまいます。

絵付　後藤龍山

昭和 30 年代から始まる様々な園芸ブームを受けて生産が再開され、西端の興楽園、京楽園の２つの窯元と、高浜と安城の３つの窯元で、全国で使われる楽焼の万年青鉢・蘭鉢のほぼ全てを作っていた時期がありました。その後、平成に入る頃までは大いに需要があり、多くの楽焼鉢を全国に送り出していました。

しかし、園芸趣味が多様化する中、プラスチック鉢の登場により、最大の納入先である栽培業者が安価なプラスチック鉢に移行し、楽焼鉢の需要は大きくに減退していきました。平成 25 年（2013）に西端の最後の窯元が窯を閉じ、西端での商業的な楽焼鉢作りは終わりを迎えました。

碧南市教育委員会 文化財課
市史資料調査室
TEL(0566)41−4566

〒447-0872
愛知県碧南市源氏神明町2
市民図書館中部分館　2階